



目次

▲通信

- 綠山感想
- 山人たわこ
- 稽程一千日
- 學校便り
- 辯論會便り
- 發火演習記
- 擊劍大會記
- 兎狩記
- 蘇門會記
- 蘇峽會便
- 其他

(明治四十二年七月十日)  
第三種郵便物認可

(定刊期每廿五日)  
行刊

第六拾四號

大正四年二月二十五日

生徒募集廣告

來四月本校第一學年ニ入學スベキ生徒約五十名募集ス入學手續ハ左記ノ通り  
大正四年二月

長野縣立木曾山林學校

○入學手續

本校ニ入學セントスル者ハ入學願書ニ履歷書戶籍謄本及體格檢查書ヲ添ヘ來ル三月廿日迄ニ差出スベシ其様式左ノ如シ

入學願書(用紙美濃紙)

某儀

御校へ入學志願ニ付御許可被成下度履歷書及身體檢查書相添此段願上候也

年月日

何府縣何郡市町村何番地居住

何府縣族稱誰子弟

入學志望者 何 某印

全上

右父母後見人 何 某印

長野縣立木曾山林學校長七宮純雄殿

履歷書

本籍、何府縣何郡市町村番地族稱戶主又ハ誰子弟寄留地何府縣何郡市町村番地

何 某印

生年月日

學業

一、何年何月ヨリ何學校ニ於テ何年修業若クハ卒業(證書ノ寫ヲ添フベシ)

一、何年何月ヨリ何年何月迄何處何某ニ就キ何學ヲ修ム

賞罰

一、何年何月何處ニ於テ何事ニ付賞又ハ罰

右之通りニ候也

年月日

身體檢查書

本籍 何府縣郡市町村番地族稱

寄留地 全上

何 某

生年月日

一、體格 一、身長 一、體重

一、胸圍 常時 一、視力 一、痘

空虛 一、痘

年月日

何病院長又ハ開業醫何某印

通信

綠山感想

綠山坊居士

○巧言令色鮮矣仁、論語の學而第一に巧言令色鮮矣仁と云ふ句がある、是は云ふまでもなく言葉飾り口先の上手な者や顔色を善くして人の機嫌ばかり取る者に仁と云ふ誠の心仁愛の情を有つて居るものは殆どない云ふ意味である、余は八十年間の實業界生活につづく感じたことがある、如何なる事を感じたか、上句の巧言令色鮮矣仁といふ事を痛切に感じた、私慾を全ふせんが爲には心にもなき御世辭を述べ自己の地位の安全を期する爲には有ゆる褒貶詐術を以て同僚を讒誹誹謗し己一人才子面をして得々然と澄し返つて居る僞紳士のあることである、斯かる徒輩に限つて一朝有事の際には眞先き腰を抜かすか蒼皇狼狽然として自失するか位が關の山である決して最後まで社會の爲主家の爲奮闘努力する様な氣は樂にしたくも持つて居ない大魚は川底に深く潜み猛獸は奥山に隠れ人間の物また平時に用ひられず。用らひれざるも自ら進で名利を求めず又退て難をさけず。平穩無事の時に天下の才子吾一人と云ふた様な面をして然も仲々幅を利かし

て居る者がある余は斯る輩に接する毎に常に嘔吐を催したくなる。元祿年間赤穂の城に代家老大石内藏助義雄。君の生前は只々其家に生まれし其子として一藩の上席に据ゑられしのみ別に際立ちたる事もせず淺野家の家老として鼎の輕重を問はれし事も幾度然も元祿十四年主家の一大事に遭遇し上下騒々の際に當り其の措置宜しきを得て世人を驚歎せしめ君公の寵愛を一身にあつめたる、僞忠臣大野の輩をして後へに墮若たらしめ。又翌年師走十四日雪中に壯士を躍らして、驚天動地の大活劇を演じ、後世忠臣義士の龜鑑として推賞せらるゝに至る自己の力量手腕を顧みず、巧言令色以て人に接し、地位の完全を計らんとするが如き徒は大石の爪の垢でも煎つて飲むがよい。四國同窓會流産母校出身者にして職を當四國に俸するもの十一名、其數多からずと雖も、一實業學校の出身者にして母校を距る海山數百里の一孤島に而も同一山林事業に従事すると云ふは誠に珍らしく、又實に異數とすべきである。故に余は一度是等の同窓相會して母校以來の舊情を温め、共に談舊語新の樂を得たきものと、一同同志にも語らひしが何分高知宇和島方面に勤務せらるゝ諸氏は數十里を距つるを以て其機會を得ざりしが、客服先輩南村乙谷の兩君主唱者となり是非共一度四國同窓會を開かんものとして其勸誘主意書を配付せらる余是れ

を見るに余が日頃抱持せる意見と合致し、大に我意を得たり、故に余は雙手をあげて賛意を表し、即座に南村兄に宛て其旨通知し、準備萬端を依頼し、只管其日の來るのを待てり。然るに何ぞ圖らん。豫期せし某々等より、公務のため、或は私事のため出席不能との通知に接せんとは、……茲に於て發起の兩君より、賛成者鮮同窓會開催不能と宣告せられ余が日頃の希望は水泡に歸せり。斯の如く余の渴望せし、四國同窓會は遂に孤々の聲をあげ得ずして、闇に葬られたり産歸の不攝生か、産婆の不注か、但しは月足らざりしか、機至らざりしか、其原因多々あらんも勸誘状を握潰にし出席の能不能すらも通知せられざりし、某君の如きは何の顔あつて發起の勞をとられし兩君に見えんこせらるか。園基は情弱の基騎馬發行中の福島大將關門聯絡船中にて往訪の某新聞記者に對し語つて曰く「近來日本國民が情弱に流れ來れる風あるは慨はしき極みなり余の見る處にては四つの原因あり第一園基、第二別莊、第三炬燵、第四温泉にて數ある原因の中此四つのものを最も甚しとなす。園基は人間の活動を鈍からしめ温泉は風俗を紊し別莊は華奢の風を醸成し炬燵は各種の罪惡を誘惑す其の上別莊にて炬燵に入り園基を爲したらんには人間はそれきりなり云々」

山人のたわごと

豐竹山人 服部啓治郎

余は日頃園基を嗜む園基には相當時間と金を費せり偶々福島大將の此の言を聞くに及んで萬更肯く節なきにしもあらず幸ひ余には本邸すらもなければ別莊のある筈なく又温泉や炬燵に入りたる事も少し(伊豫の如き暖國にては)將來とても自己の別莊にて碁を打つが如き事は絶對になきと信ず。さすればまだ情弱の淵に沈むには前途尙遠なるか……諸君の中には碁園を嗜まるゝ方も多からん其の感想果して如何、二月十一日軒燈影暗き新居濱の寓居にて

無沙汰

師恩を忘れたのではない、校恩を念はないのでもない、亦校友を棄てたのでもない世を棄てたのか……棄てたのでもない。然らば會門を出で、既に數年常に音信を絶てるは何の理由が、乞ふ怨せよ、生きて居るが爲なり。活社會の風波と惡戰苦闘し尙且つ數年の運命に弄せられつゝ生を求め人生に意義あらしめんと焦慮りつゝあるので

遂に無音勝ちであります。

今昔

昔、健氣にも理想とかを抱いて會門へ入つて人並に修業とか云ふものをして愈々理想を實施すべく踏み出した會門々外さあ大變、第一歩世の中の風がビーツと來た、馬鹿に冷たい。第二歩忽ち現實の浪に捲き込まれた。第三步浪轉。第四步翻弄反覆、未だ岩にも登れず岸にも着せず此先何年何月になつたら屍がつく事やら逆も人間並に音を立てる處の餘裕なし、ともすれば沈没しそである。かくする間に去年の秋既に子の親と老ひ込んで了まつた。然しこれより責任益々重く肩の重荷が愈々重く、油断も隙もない。

小失敗

會門卒業後直に實業に就いた、扨愈々仕事をしつて見ると活版刷りを讀む様にそうすらすらとは行くものではない、兎もすると理想どころではない、其地方の状況及林業を組成する諸因子を深く研究開明すべきは勿論だが如何なる些細の事でも注意を要するものである。殊に在校時代に實習を輕視した餘弊に依り實業に従事してからつまたぬ事に失敗する事が多かつた。

魔力

浮世には運命と云ふ不可思議な一種の魔力がある様である。山人は實業に従事する爲に學校に入つたのだから卒業後は直に實

業に就いた。失敗も多々あるが成功と自信すべきものも澤山ある。而して一生を實業に送るべく覺悟し努力した。目的の遂行は頗る愉快であつた。國民の義務で且つ人間修養の一なる軍隊生活も濟し、妻も迎へ平和に、楽しく實業に勵むだ此間、村役場の仕事もしたが官廳等は少しもなかつた。然るに運命は急轉直下山人を實業界より去るべく止むなき事情の下に投げ出された。

腰辨生活

りこで山人は事情餘儀なく老父母を伴ひ妻を連れ官海にいや腰辨生活を一生せねばならぬ事となつた。先づ大正三年四月長野縣更級郡に腰辨を吊るし込んだ。山人が農業技手と云ふを拜命して半農半林の職務に従事したこれが腰辨の第一歩隨分苦勞の事が多かつた。殊に氣苦勞が多い。それから十二月に長野縣林業技手を拜命し林務課へ轉勤したこれで始めて自分の家へ歸つて來た心地がする、隨分澤山の家内だ、兄上達が多勢で皆可愛がつて呉れるが後に御目玉を頂戴する時も澤山だらうと思つて居る。

渡る世間には鬼が多い

古人は「渡る世間には鬼はなし」と云ふたがむしろ、世間には鬼ばかりでもなしと云ふた方が當を得てゐる様に思はれる。神も佛も居るが鬼も多い、世間には波もあり風もあり晴流黨派陷陣種々雜多のものがあつて生活上、社交上困難なものである。

三角主義
世の中の荒波學者某が山人に教へて曰く
『新米の腰辨が此、七六ヶ敷い世の中で親
妻子を養つて生きて居るには至難である、
因つて十年許の間は三角主義を遂行しろ』
と云つた。山人は熟慮數番斷然實行する事
にした。三角主義とは何か、曰く、事欠く
義理欠く、恥かくなり。然らば實行方法如
何、次第に告白する事と致します。(未完)

誓程一千日 (一三)(會)

諒闇中であつたからでも有らうが各地の
蘇門會の意外に尠なかつたには聊か失望
せざるを得なかつた、否!會同の模様を
聞く事の鮮なかつたには少々面喰はざる
を得なかつた、若し有つたならば後れ馳
でも知らせ合をせやうではならないか?
◎林友もドーモ御連中が御品振つて 否か
割合に消息を窺はれない、僕の持論を繰り
返へせば十一月號の奥州通信青島や朝鮮便
りの様なものを適切と思ふ、譬へ燒き直し
であらうが何で有らうか!

◎若し岐蘇林友の様な性質の者へ名文章や
特種の研究を……と云ふ氣が諸君の胸中
に萌すなら夫れは誤りだと僕は云ふ、何で
も通信が宜い苟も三百有餘の兄弟が我が本
士を卷席に延ひて四國九州支那朝鮮臺灣北
米乃至は數千哩の南洋に發展して居る優勢
な學校が今外に有るか!特に北守南進は我

數戸、併も人は喰はざる可からず、憐む
可きものならずや、然れども此悲しき飢饉
も三ヶ月乃至四ヶ月を待てば、芋は再び納
むるを得回復せらるなり。
我輩喰ふ事に於て多く他に譲らず、種子嶋
に於て藁を喰ひ、嶋人を驚倒せしめたり、
但し同所には藁の所産頗る多く、併も島人
之を恐るゝ事蛇蝎より甚だしく、怪物に比
するあり、之を見れば身を縮め正氣を失ふ
ものさへあるなり、然るに茲にもハメと稱
する魚族あり、紅褐藻中に住み、色澤形貌
稍藁に似たり、島人藁海中に入つてモハメ
となる、藻の異臭藁の如く喰ふ可からず
併も嶋人の最も珍重する所、我輩涙を振つ
て習練三年、よく其真味を知り得たるも、
予に習ふて藁を喰ふの人なきは悲しむべし
種子島に八年島に教へられ、嶋に育てられ
たれど、我輩教鞭の力は此藁に比すべきも
のにして誠に慚愧にたへざるなり。

琉球の珍珠は何は借て置き豚なる可し、本
縣豚の處産十萬頭、一戸平均一頭を養ひ一
頭を消費する割合なり、芋によりて生活す
る彼等には、此脂肪蛋白の補充を必要とす
るなり、琉球の豚は其家族の糞便と、芋皮
を以て主用食料とす、乃ち琉球人は直接糞
便を肥料に用ひず、一旦豚の内臓を通過せ
しむるあり、此爲に糞便は一層有効となる
と共に一年の了りに於て、豚一疋十圓乃至
二十圓の收入あるなり、今之を全國に普及

國の國是だ是れからドシ、遠征せにやな
らん又朝鮮や山東へも其の通りだ茲を以て
前渡のものは一面之れを林友に紹介の義務
が有ると共に國民にも告げるべきだ、又異
域ならずとも各任地の消息を知らせ合へば
母校を中心とする思想上の堅き結合が出来
る、僕は夫れが林友誌の目的だと信する
◎僕は蘇門の結果を望むや切なる事は前と
少しく變らぬが併し又例外の伴ふのは止む
を得ない夫れは多數者の名聲には少數者の
犠牲の必然なる事夫れである、而して此の
落伍者の中には身体の羸弱なもの、在るは
勿論だが小學校で習つた修身を忘れた者も
含まれて居る社會は禮讓を欠くものは斥け
るから

◎某會社の一重役に採用を懇請せる一青年
曰く『己れは何等の特徴を有せず而して頭
と腹とは人並み以上に悪し』と何ぞ其言の
壯なる!僕は此種の青年に知己を得度く思
ふ
二月八日林業講習會講師として須坂町に

琉球より 團原 鈍 狂

曾山兄足下足下の稽程一千日に促されて、
漸く筆をとりたる予は、先づ此稽程一千日
より得つゝあり、多大なる慰藉、信愛なる
助言、峻烈なる警告に對し、銘謝せざる可

したらんには、其鮮は暫く措くとするも一
ヶ年一千万圓、一億萬圓の收入となる、ハ
ムやベトコンは海外に輸出す可し、國産獎
勵の大胆目なり、之を國民の腸に投せば、
沈滞せる神經衰弱症的國民をして、眞の活
氣ある奮闘の民となすを得可し。
斯くの如きは我輩の論ず可き事ならずと雖
も、糞喰ふた豚の味は、又格別到底内地産
の淡白紙を咬むが如きに比す可からず、耳
の刺身足の吸物腸肝臟等の、内臓料理は珍
とするに足る可し、糞を喰べるを見之を口
にせざるもの、初參の人に多しと雖も、早
きは一ヶ月運きも一年にして、糞豚崇拜の
人となるなり。
山地出張等の場合開墾地等に宿れば、山の
中腹に宅地あり、向ふの峯を立ち上り行く
朝霧を眺め、水の流瀧の音等聞き、園生に
咲ける草花、蔬菜の青々しきを打ち見や
つ、悠々として便する如き、蓋し三尺四
角の小部屋に踞するに比し、快幾何ぞ趣
味幾何ぞ、時に妙齡の婦女子と並便する如
き事あり、之より出物はれ物所嫌はずの止
むなきに出ずるとするも、又面白からずや
吾人の生活上に最も嫌な、併も甚だ不都合
な奴は、病なり、兄卒業後病を養ふ通計八
ヶ月に及ぶと、苦悶察す可し、我輩も通計
すれば二ヶ月位にはなる可し、此間暴飲暴
食の結果腸カタルを起したる事多きは、御
耻しき次第なり、琉球に伊波と言ふ琉球史

からず、而して予は切に、兄の健在健筆、
題意にちなみ、よく一千回の了りを、全ふ
せられん事を、切望するものなり。
兄の向ふ所、予等の平凡なる日常生活なる
もの、如し、予も又一個の動物として、飢
へて喰ひ寒暑風雨を凌ぐ爲に、生風子の
見舞はぬ程度に着換をなし、安い棟割長屋
に寝起きせり、晨に出勤時間の早きを嘆じ
夕に退勤時間の遅きを欠伸して待つ、月給
日迄待ちきれず、借喰ひ等をなすアイドル
腰辨なり、出張しても、可成口先や腮先き
で万事を失敬せんとする如き僻あり、然れ
ども心常に之を責むるあり、信仰談議、修
養訓等を聞讀するや、時々真似目になる事
あり、予は將來此時々を度々とし、度々を
毎日に、漸次改良せん事を期せり、殊勝の
心掛けを賞めて被下可し、傍よりんふあり
既に運しと、然れども予は當年尙三十一歳
一疋子一尾に過ぎず、何ぞ晩かる可き、
將來をトし從來のフリを改め、緊揮一番奮
闘以て兄等の、冀尾に附さん事を希ふもの
なり。

沖繩は霜も雪も降らぬ國、破衣忍ぶ可し白
舎堪ふ可し、喰物に至つては、熱帯の蒸熱
に浸さるゝを以て營養豊富なるを要す島人
多く芋(甘藷)を常食とす併も時々暴風乾魃
の襲來あり、一部の民は飢渴に迫り、蘇鐵
の幹を喰ひ又澱粉粕を用ひ、蘇鐵は時に中
毒し、一家を全滅する事あり、昨年之を開

専門研究の、言語學者あり、久しく病を得
て床にあり、其所感に曰く病氣も仲々趣味
のあるものだ、健康な時に味はれなかつた
或物を味ふ事が出來た、生に對する欲求に
強くなる、死を眼前に控へて居たので凡て
の事に眞面目で、無駄やソツがない、讀書
を禁じられたから思索に耽つた、思索の方
が讀書よりも知識を得る事が多い』と。
病はよく人の同情心信仰心を養成せしむ
古人曰く病を知らざるものを友とする勿れ
と、兄が同窓後輩に對する、熱烈なる同情
心の如き病中の賜物たらすんばあらず、驗
神の如き、元より他の揣摩す可きものなら
ずと雖も、信仰の疑結と言ふを得可けんか
我輩今健康を損ず、出張中旅舎の一隅に憩
ひつゝ、轉々病者の心事を回想しつゝ、此
稿を閉ぢんとす。(大正四年壹月十四日)

短歌 滯郷雜信

わが幸は老父の友がうちへび酒酌む冬に來あ
はせしかな
母さむて石臼ひけばおほいなる無知ななりたる
こゝちするわれ
春の辻四すぢの路をゆきかふる人美しく皆粧ふ
かな
わが財布半銭入りたるがくくらみて轉びてある
に悲みのわく
午後の二時、村の沈黙をうち破り溜池の普請の
岩の音、音

年ののは真日のうるはしくれなぬに雪さんら  
さかやきにけれ  
何さなく今日はよ事あることし日の出に向ひ  
口過ぎすも  
わが心さのの煮汁にこそく吸ひたる後のか  
なしみに生く  
わが庭に雪降り雪の常盤樹にかゝれるさまよま  
こそよろしき  
ろの昔伊左てふ白痴口ゆがめ遊び居はけりなつ  
かじきかな

學校記事

○文部省督學官來校 一月廿八日林學博士  
右田半四郎氏は文部省督學官として高野學  
務課屬隨伴來校種々調査する處あり授業を  
も參觀せられたり  
○二月一日 校友會辨論部大會開催盛況を  
呈す(詳細は大會記事にあり)  
○兎狩 二月九日水雨を冒して新開村地籍  
の山地に兎狩を舉行す  
○擊劍大會 二月十一日を卜して舉行寒廿  
日間の稽古其效を著し阿吽擊突獅子奮迅の  
勇を鼓せしは頼もしかりき  
○竹田宮殿下 二月十四日諏訪湖の演習を  
終へて豊橋へ御歸營の爲福嶋驛通過あら  
せられしにより職員一同御奉送申上ぐ翌日  
は豊橋騎兵隊通過の爲職員生徒一同之を見  
送り歸途福嶋小學校に於ける加藤海軍少佐  
之講演を聴く  
○二月十六日 放課後長野縣巡查教習所武  
術教師小泉周太郎氏來校せるを以て劍道部

員は同氏に就きて稽古を乞へり  
○校旗成る 豫報の如く校旗の製作に就て  
は委員を擧げて一任しありしが舊冬北村教  
諭歸省の際京都高嶋屋に交渉注文する所あ  
り附屬品取揃へ運賃共一切八十圓にて此程  
出來上り着荷せり色合は縹地質は縹瀨二枚  
合せ中央に徽章(山林の字金刺繡楡葉は緑)  
周圍の總は純縹、輪廓の線は金モールなり  
因に八十圓の中五十圓は購買利金より幾三  
十圓は職員生徒より醸出する筈

校友會辨論會

(二月一日) 翠 都  
一月卅日に開催の豫定なりしも都合によ  
り延期し、今日催せる也、昨夜來氣温著し  
く降下し、今朝尺に近き積雪を見たり、一  
昨日の發火演習に疲勞せしも昨日の休日に  
快復せられ、意氣縱横の會員は九時の振鈴  
に早くも會場につめかけぬ、開會に先ちて  
七宮會長より校旗調製に關し「先般の決議  
に基き購買利金五拾圓に尙三拾圓を職員生  
徒にて寄附し本月中に完成せしめん」との  
提議あり即刻異議なく決定せられたり  
例によりて、岡目記者は辯士の芳名と演題  
と其處此處の噂を御照會申し、辯士諸君に  
は内容を以て御報告申す次第也  
▲開會の辭 七宮會長「玄冬三旬の休暇に  
蘊蓄せし抱負を、この大寒四年の新論壇に

提げて立て、而して本部最終の期會に掉尾  
の大雄辯をなせとの辭なりし  
▲現代三年中田 穰君「入學以來沈黙せ  
し金口は開かれ、現代思潮に危險なる  
もの多し、予輩はこゝに於て吾青年が武俠  
的精神を發揮するを希むてふ説也、君や中  
々に隅にたけぬ代物也、寧ろ今日迄の黙口  
を奇とす、但し從來彌次界に覇を唱へ、壇  
上よりも壇下の勇士なりしか壇上に立ちて  
は更に一々肯綮に値する説あり 音吐亦佳  
▲所感一片 三年恩田司馬之助「山陰道は  
伯耆の國の住人として夙に名あるの君  
壇上に立ちて舌を動かすはこれも初陣也、  
説くところは、君が郷國伯耆が山陰線の開  
通によりて經濟界の不振と非文明惡風潮の  
輸入をなせし實験より、本會の發展策とし  
て本多博士の意見を評し加ふるに獨創の見  
を附す。青年は何物にも拘泥すべからず、  
博士の説も何ののののののののののののの  
受けたり、支那の如きは拳骨政略に出てよ  
と最後に言ふ蓋し活氣の縱横に基くもの。  
▲笠置山に登る 一年岩田元吉君「紀行と  
懷古、若き血漲る悲歌の士にはあり得べき  
性也、君や大和地方に跋渉せし往を語るに  
際し常に多恨の史蹟を拉し來りて得意の泳  
史説をなす吾生大にこれを贊す、茫々六百  
歳の古の戦記を誦し、國民性の鼓舞を叫ぶ  
青年には此種の氣魄ありたきもの也、徒ら  
に實行の伴はざる大言を弄すべきものは

▲年頭の所感片々 二年坂本光太郎君「昨  
年の大事件を把束して、寅年は荒年よと云  
ひしは面白き説なりき、新年の意義は毎日  
か元旦也と云ひ、一休怪僧の句を借りて自  
覺を促す、いづれも年頭の所感として穩當  
なりと謂つべし、唯あまりに豫言的の節多  
くして易者の如く見へしは白壁の微瑕のみ  
例會の比して圭角の少かりしは君の説か  
熱烈なる志士的より圓滿なる紳士的に進め  
に依れる乎

▲Meaning of the life 三年飯沼要人君、  
君近頃好んで人生問題或哲學思想を論ずそ  
れ可也、君が襟懷が宇宙の神秘に觸れ、興  
忽ち到りてこゝに數百言となる。説くとこ  
ろは理想の太陽によりて現はるる虹これ人  
生也との意義を了解すべしといふに在り、  
大に思ふ處を言ふべし、その間に思想も辭  
令も練達せらるべし。

▲日記論 三年都竹武次郎君「かく申す記  
者は大袈裟なる演題を掲げしも論ずるとこ  
ろは唯自己の経験によりし數言のみ『國の  
日記は歴史也、社會の日記は新聞紙也然り  
而してこゝに個人の日記なくして可ならん  
や』の日記の必要と、日記の力と權威及自  
己批判の須要なること、自助の人は必ずや  
これを具へ以て後昆にその思想を残すこと  
並に人生須臾この間責任ある毎日を過すべ  
し』と泣言ならべしのみ、本是れ井蛙の管  
見たるを免れず取捨如何は吾輩これに關せ

▲良友 三年萩原惠治君「嘗て本校の服裝  
について論じたる事ありしと記憶す、今者  
良友は心友にして權利名譽逸樂の友に非ず  
との論斷、亦一廉の真理ありし、發言「  
ウユフ」と聞へしは梨花一技雨を含むの愛  
嬌なりしか。

▲蕪でも喰へといふ、語を論ず「一年山下  
不二三君「世間においてあらゆる罵言の中  
この言はかり人を愚弄したるはあらじとて  
その語源を説き、かゝる語を以て對せらる  
ゝあらばよろしく死を以て對せよといふ論  
旨、君も本壇の一嬌兒也、自愛したまへ。

▲新武士道 二年川口勇次郎君「君の演説  
は今まで大低濤面かいて淀み聲にて行ひし  
故、兎角聽者を齒搔ゆく覺らしめしが、今  
日は極めて大出來なりし、態度にも音調  
にも抑揚にも論旨にも云ひ知れぬ愉快を漲  
らしめしを認めぬ、演説の要は聽衆をして  
耳を屬せしめ吾が意思を徹底せしむるにあ  
り耳を屬せしむるには、態度音調抑揚論旨  
及表情に於て、の要領あるもの也、これ  
ら回を重ねて自得すべきにあり、君の論旨  
は方今青年の懦弱を打破すべきスパルタク  
ス教育法の要を説き、軍隊式新武士道を發  
せよといふにあり。君にしてこの論あり人  
を得たりと謂ふべし。勇士に千里の駒を與  
ふるの類たらざるは非ず。  
これにて時や午食の刻暫時休憩す。

▲人類の生存競争 二年下平佐門君「適者  
生存の大渦は國と國との競争、人種間の軋  
轢、強者の優勝、文明と共に激甚の度を高  
むてふ論也、重口に過ぎし故待遠しく思ひ  
し聽者の騷擾多かりしは遺憾なりき、君よ  
來年うの論壇には前辯士の批評中に記せし  
が如き演説の要素に向つて修練せられよ、  
君は論述に眞摯なるに於て上進すべき資あ  
り然れども雄辯家とは夫の活動寫眞の辯士  
の如きとは自ら異なるあり、この意を記者が  
老婆心の識言において説解したよふな。

▲青年の自覺 二年長谷部久雄君「古今東  
西の偉人が活躍せしは概ね二十才前後なり  
し事並に凡ての偉業が時代青年の力に須ち  
し事の引例極めて豊富にして而かも妥當言  
辭亦艶麗、君はこれ二年級辯士中の録々た  
るもの、幸に次回的發展を望む。

▲時代の影 三年早川一雄君「紅玉の如き  
林檎の果は往々にして腐れ、ロマンの如き  
國の文化は盛んに盛んに盛んに盛んに盛んに  
や、業的文化は盛んに盛んに盛んに盛んに盛んに  
人情の轉變は唯一腕の飯の高下にあるあり、あ  
ゝ貧する勿れ、貧はこれ誰かなせしぞ、皆  
これ社會の要求によるならずや、時代の影  
はかくの如く文化の照る強き光の彼方に黒  
く濃く映り響き來る呪咀の聲を聞け！てふ  
論旨、近頃耳障りよき説なりし、君も過古  
三ヶ年を黙してこゝにこの大雄辯あり、唯  
小缺は、挿話が辯士然たりしとのみ、これ

とて九牛の一毛のみ。油断大敵—新家先生—油断の語源で東西古今の真理ある實例話とを前提として、從來最も事件多きこの頃に於いて寸毫の油断もあるべからずと警告せられし、御説尤も也、生徒の身を思ふ師にあらずして誰かこの警告戒飭をなす者か。

この自覚ある人をこゝろ活人とこそは云ふべけれ、徒らに人生五十年の夢を信するものはこれ死人なり、吾人は活人たらざるべからずとふ論なりき。君が真摯なる態度音吐とともにも吾人は今の獨創の見あるを欣ぶものなり、爾來一歳辯論部起りてより盛大を極むるに到りしもの、部長たる君の熱心與つて力ありし、校友會の爲祝し謝すべき哉。

みたまへ(安評多謝) (辯論會にて雜誌部にも別るべき日の近きを悲しむつ)二月二日—南寮七室にて記す) 發火演習記事 翠 郵 生 大正四年一月卅日舉行— 名にし負ふ蘇峽の深雪も昨今の氣温に消え氣味なりしに昨日の雨は雪を融かすの春雨の心地して降り瀧ぎ—入積雪を少からしめぬ。

れたる歩兵第一中隊にして直今この地點に達せる也。敵は下伊那郡赤穂方面より我本隊に向つて攻撃的態度あるものゝ如し、故に本中隊はこの敵を大原方面に牽制せんとす、土人の言に依ればこの中仙道街道の要地七笑橋附近に敵の一派遣隊は陣を構ふるものゝ如しと、本隊は之を驅逐しつゝ大原方面に進出し大に敵を牽制せんとす、故に田近第一小隊長は部下十二名を率ゐて本隊の前方約三百五十米突を以て尖兵の任務に服すべし。

援隊の奮起を促すに至り、即ち福山中隊長は全線を擧げてこの高地攻取の爲次の如く部署しぬ、新銳の兵も、弾も、意氣も充滿せる部竹小隊をして民舎に沿ひつゝ敵火に隠蔽して本隊の左翼となり敵の側面に

潰亂状態にあり、我軍にては中央柳澤小隊に多大の損害ありしかども、兩翼小隊は之に顧慮するに違わらず直ちに追撃射撃に移らんとせり、折しも休戦の命令一下してこゝに戎器の露を拂ふに至れり、壘上壘下敵味方の死屍累々たるべきわたりに屯せば攻撃の結果につきて福山中隊長の講評あり、大体前述の如かりし、時正に十一時半春光戎衣の袖に照り又銃は此平安なる野色に調和せず殺伐の氣を漲らしめぬ、腰なる糧食を開きて空腹を醫し元氣を昂奮せしめぬ、あはれ打もらしたる敵よ今に目にも見せて呉んずとばかりにやをら我隊は起ち上りぬ、こゝは大原の入口三叉路なり、地や蘇峽第一の平曠銃聲の反響すべき山遠ければ軍を行るべく馬を驅るべし而も天氣は愈々快晴也、時に福山中隊長よりは状況及命令あり。

分進隊若干は中仙道上にありて吾が大原進軍の側面を窺はんとしつゝありと、小嶺なる敵の行動よと柳澤小隊は直ちに前進し敵の小部隊と應戦しつゝあり、かくては戦機を失し且つ大原進軍を滞滞せしむるに依り茲に又もや都竹小隊はこの敵を其の側面に出で、驅逐すべき使命を帯び民舎の庇陰を辿りて突然その側面を撃ち且つ突進すればあはれや鎧袖の一觸に大原方面なるもの主力に合すべく通逃せり。

こゝに於て柳澤小隊は先登となり、大原の奥深くさして前方を警戒しつゝ進軍し、田近小隊は援隊としてこれに次せり、敵の小部分を驅逐せる都竹小隊は傳令に基き本隊に合して更に増援の任に當れり行くこと半時にして大原苗圃附近に至り地域やうやく平曠を到すところに着せし頃前面阜丘に敵影を發見し先登柳澤小隊は先づ散開してこれに當りぬ、然るに敵勢頑強にして戦線やうやく廣がりしかば都竹小隊は柳澤小隊の左方に延伸増加を行ひ火力を増したりしかれども敵は此時既にその戦線を我に數倍せり、これ有力にして且大多數なる増援隊が此の方面に出動して現れたる也。

嗚呼我軍の規畫の如くわが中隊はこゝに多數の敵を牽制せり、最早こゝに固守して強ひて不利の戦闘をなすの愚を學ぶの要なし依て手習神社南方高地なる攻勢防禦的

要害地點迄退却し此所にて再び敵を大に弄せんとの決心の下に退却命令下れり依て田近小隊は收容部隊となりて敵火を引かんとせしかばこゝにわが前線二小隊は悠々戦線を後にせり、退却せる兩小隊は七笑橋の右方丘地に陣を敷き田近小隊の退却を安全ならしめ且つ敵の追撃部隊に多大の損害を與へ敵の脚躓する間に全隊を引き揚げ更に後方優勢險要なる手習神社南方の高地に據り敵の追撃隊を待ちたり、折から上松なる本隊よりは「我中隊の忠實なる牽制運動その功を奏して本隊所求の目的を達するに極めて有利なる戦局の發展を見たり」との賞辭と共に機關銃二門の増援ありしかば全軍の士氣大に振ひ敵の追撃隊を思ふが儘に誘引しこゝに機關銃の功を藉りて前に我を惱まし敵の機關銃隊に對抗し暫時交戦しぬ、我陣地は極めて有利なりしかば敵の襲撃に對し多大の損害を與へ先づ左翼柳澤小隊次に右翼田近小隊中央都竹小隊の順に突撃し我陣地下に敵の追撃隊を殲滅せしめぬ、かくして本日之戰闘は終結したる也。

一月二十二日より開催中なりし本擊劍部寒稽古は昨日を以て終了したるを以て本日紀元節の佳節を以て講堂に於て進級仕合を兼ね大會を開催せり

午前九時部員一同講堂に集合し會長の開會の辭あり次で松原教士の劍道に關する訓辭あり終て本寒稽古中皆勤せし者に會長より皆勤賞状を授與せられたりとの人名次の如し

種倉、長崎、都竹、加茂、下平、丸山(嘉)清井(清)、各務、藏田、宮島、皆川、長坂、小田、奥村(和)、白木、安江、岡田上嶋、以上十八名

式終つて松原教士審判の下に仕合をなせり



三人拔優勝者

一年 宮島岩見君 一年 榎原武重君  
 一年 清水徳久君 二年 鳴澤義雄君  
 一年 奥村和吉君 三年 長崎千一君

かくて午後三時半仕合を終り會長の閉會の辭ありて散會しぬ、當日は福鳥警察署員諸氏を招待したれども折悪しく事務多忙の際として参加を得ざりしは遺憾なりき。

うはともあれ本日の試合は二旬練磨の技を發揮し且つ刻下の精神に緊張を興へ得たるは吾人の確信するところ也、吾部今年度最終の活動も茲に有終の美をなせるを以て部員一同参集し茶話會を催し後本部の萬歳を三唱せり、會員諸君願はくは吾部の前途をして校運と共に優秀盛大ならしめ事を。

(以上擊劍部報告)

二月九日兎狩記事

稀有の深雪は太りては瘦せ増しては耗り

こゝしばらくの定めなきしに今日は朝空奇しくも氷雨を孕みて蕭々の音は白皚々の野を叩き凍り爛れし面には水氣漲り渡りぬされば空氣脈々として体に迫りことさら指頭の冷寒は觸覺をさね失ひ終りて實にも堪に難き思あり。

あゝ如何なれば天公の斯くまで我等を虐ぐるものぞ斯くまで妨げなすものぞ。

あゝされど心勇ましく氣剛なる我健健いかにこれに組まれて挫け終らんややは寧ろ天公の我等に大任を下さんとする試練に非ざるかと思ひいたれば踴躍としてさてこの九日午前八時先づ鳴り渡る振鈴の音に雄々しき姿を校庭にと現はし細雨霏々たるを侵して整々堂々獵地に向けて出動しぬかねて撰める獵場は例にそむきて新開村役場側方雜林の中山嶺はごよき處に綱曳き渡し壹百五十の健兒は茲に叫喊の聲張舉げ奔奔と全山を走り圍みて三寸隙をだに余さざる勢も迫る喊聲は木魂に響きて山靈の夢を破り兎軍の度膽を奪はずんば止まざる底の覇氣を示しぬ。

さるほどに大山鳴動して鼠一匹にはあらねども眼ざめし儘の小兎共寝惚け眼に出づべしと炬の如く眼見張ればうれしや勢子線の前方に小兎三頭現はれぬ。

驚破ころ獲物御座んなれど勢子の面々一時は意氣頗る昂りしも敵に背をみせて命からがら逃ぐるのありさままことにあさまし

今更追ひ打つ氣力も失せあれよと逃ぐるにまかす實に其慈悲? 其大勇擲すべきものありやなしや。

斯くて獵場を改むること前後二回よくそのベストをなすと雖も益々猛りて降りしきる氷雨に其行動作業を妨げらるゝこと大方ならず常に晝寝の兎軍として龜さんに敗れをらしめざらむ様との警告を興へしのみ、正午折角努力の趾を深雪の中に留め首をすくめて凱旋す全員無事直ちに食堂に會して暖かき馬汁に空腹と寒氣とを醫す

凡る健啖無比の我が徒卓上一菜一汁の余す處なく喰べ盡して恬然しかも其形骸のみ累々として算なし。

總て校長主唱の下に校友會萬歳を三唱なしかくて楽しく散じ終りぬ。

あゝ今日折角の壯舉獲物はたしてなかりしか否我等は這般の剛氣と忍耐とを以てより重きより尊き獲物となすに躊躇せざるべし願ふに兎軍や遠く我等の勢力範圍を脱して後山深く遁入し我等の寛大と慈悲とを頌するの太平を鼓腹して祝ひつゝあるものならん。(遠足部報告)

○「獲物なくしてたかへり、鍋中に馬を煮しめ兎肉にて候とさあらぬ体に啖ふ。これをや頼馬(兎馬)とこゝろいふべけれ」とはK先生の駄洒落也、穿ち得て妙、依而附言。

### 蘇門會の記

エス、エム 生

新年早々例年の様に蘇門會(木曾在住卒業生)を開こうと寄々相談をしたが會員の多數を占めて居る御料局長が多うろく、出張中で比較的多數の人々が都合よく出席せらるゝは二月中旬との事に段々相談の結果二月六日開會と決定した。各手別をして會員に出席を乞ふた所が頗る其成績で七八分は參會する様に見當であつた。二月六日前には木曾支局で各出張所長の何か會合があつた出張所職員の人々が出席するには任地を離れる事でもあり旁々内諾を得んとした所が諒閣中の事であるからその事にそれとあるべき事と決議の末御料局長の人々には通知を發せし事にした。

二月六日は来りぬ!!  
山林學校の先生方は全部出席されに前書記安井さんも加はりて總勢二十四人の盛會であつた以上の理由で會員の大多數が參會出來の極めて局部の會合であつたが殆ど全部出席で豫期以上の成功を告げた。

新任七宮校長先生として初めての會合にかくありしは先生並に母校の將來を定めて斯く盛であるならと思はれる殊に今度は大に底抜けと言つては變だつたり各人の極量まで凡ての事を進せしむる考へで原動力を普通の五位の比例にしたので各人各々すあらんと言つた之れが眞勢を示して居つたので又物凄かつた之れが眞勢に睦しき集いて開會前既に言笑相親まみ情誼は骨肉を分けた兄弟のそれにも勝つて居た。

午後六時半宮下信一氏の開會の辭に初より次に現れしは老いて益々盛なる安井前書記ある二十有餘貫の巨体誠に壯者を發ぐの概がある宜なる哉思ひ起す氏が六十五歳の時新年會席上にて曰く隈伯は百二十五迄生きると言ふが小生は五つ増して百三十迄生きる言つて一句

六十路餘り五つとせ経しは吾齡  
凡半ばと思ひけるかな  
誠に盛な話してある氏は、蘇門會の席末に列するの榮  
世にうさくならしなきは忘られて  
老も今宵は若くへりけり  
若人にいりまじはりてくむからに  
老もいりまじはりてくむからに  
老もいりまじはりてくむからに

と詠じて今後三十年間は必ず出席すると言つた正に精力絶倫である。

宴は開かれの長錦が百川を暖るが如き勢である少しはつてにこれに紅葉する時分に折はよしと三時、宮下兩氏が出てくれより福引を致しませと告げた拍手盛を起る各人はよび出す毎に大童となつて學校生徒が免狀に貰ふ様な体裁で一々受取りに出た。

林業家の抱負。となつて木村晋二郎君が出た、之れは天下に秀山ながらしむて毛生液が出た、島内先生は

場先生が欲しそうな顔つきで見て居つた。  
歐洲戦亂の公報。安井さんが距た之れは互にほらの吹きくらだ、らつばさほらびの玩具が出た老人あくまで若々しい。

新任山林學校校長、ごなたで丁度校長先生が當つて一同拍手の内に立つた之れは品物は墨一丁である其別に色が何の譯ではなく七宮すみ雄であるから墨の譯である眾記し置くが墨は赤では無く黒いのであつた其他に面白かつたは。

蘇門會の勇士、之れは牛乳馬食で牛と馬の玩具。  
山林學校卒業生、木に離れられぬと言つて彼の玩具。  
等であつた喝采の内に福引を終つて夫から本會の特徴一人一藝が初まつた宮下氏立つて適宜指命すべく而も必ず指命を守るべき約束であつた。

最先に指命されしは狩野深一君舊名池井氏である高座に進入して六根清淨をやり出した流石御手のもの事さて堂々たる者であつたごつと笑聲起る木村晋次郎氏の奇術術の中より歌を出すと言ふの前ぶれ小手しらへ其他身振は黒人はだしの上來て首尾よくワン／＼の犬が出た君とちが本職ですか開きたい位半ば頃七宮校長先生を指命するや模範的千取足で出て来た股けの席上に着くや或は高く或は低く歌ひ出した清濁大喝采新案先生と指命とるや此處彼處に。

カチニ出シヤ、カチニ出シヤの注文出る  
高座に出つたや座席を組んで閉目暫時視線の全部は先生に集まつた今にも美しき聲にカチニ出シヤを歌ひ出すかと思はれる瞬間大聲一番喝!! 仲々きりい事や。

北村先生の都々逸を聞かせた宮川先生のナカノヤン  
々々節と各十八番の箱を開かせた宮川先生のナカノヤン  
々々節に其々要領で福山先生の初對面の挨拶其他各人各藝藝を演じた加藤書記海老を以て出ての謡曲何さかて芽出度けいれは征矢野書記の横笛と共に評判宜しく野川君の奇行蠟燭火の使ひ分けは六分の成功川崎獨特の軍隊節征矢野の軍人式サノサ節岡戸君の換節新井君の堤の提灯肥田君の飛脚節等其主なる者で大々的好評の内に終つた此間各自席に付いて指命するや速に各藝を演ぜられしは指命の任に當つた私に愉快に連行する事が出来て心地よかつた。

それよりは各自入亂れて歌謡交々至り清濁する人もあり微吟する人もあり歌謡起り何れも胸襟を開いて肝膽相照し談笑樂樂時の移るも忘れて散會したるは午後十一時であつた。

山林學校の方々が會費持參で御參會被下しは吾々發起者の深く謝する所でありませ。

### 蘇會便り

小羽根 報  
時は大正四年一月九日の夕七時、蘇門會出着者は

甲府市八百竹に於て定期蘇林會を開く、一同着府會則の訂正、變更の件を議決し終て小宴を張り各自胸襟を披きて談笑を盡し夜十時散會せり左に會同者の姓名を列記すれば

管理課員 宮川永三君、中島昌利君、齋藤海藏君、上田綱太郎君、佐藤光三君、原田久保作君、小林政重君  
葦崎出張所員 島田雄太郎君、小羽根安治君  
中巨摩郡役所員 崎澤國治君  
蘇門出張所員 北村竹次郎君、木下禪藏君  
谷村出張所員 塚田大君 林務課員 前田正義君

### 會員消息

○日井辰雄君は今回本縣林務課雇を命せらる  
○市岡淳一郎君は舊蠟中石川縣珠洲郡苗圃監督を止めて歸郷中なりしが今回野尻出張所に俸職することなれり  
○北村竹次郎、木不禪藏兩君は今回林業技手となり山梨縣嶽澤勤務を命せられたり  
○澤柳壽夫君は千葉縣久留里小林區署へ俸職

### 安藤前校長慰勞金申込報告(第四回)

服部 啓次 郎君 市君  
仲田 伍次 郎君 市君  
松宮 本 太君 市君  
金一圓五十錢  
金一圓五十錢  
金一圓五十錢  
小計五圓  
累計四十六圓  
(正誤) 林友第六十二號掲載の安藤先生慰勞金申込中  
金貳圓中田辰雄君とあるは金壹圓の誤殘一圓は石坂季  
治含寄贈の分の由同氏より申込有之候に付訂正す

雜誌費領收報告  
一之瀬 製裝書君  
一金五十錢

大正四年二月廿三日印刷 (定價三錢)  
大正四年二月廿五日發行  
長野縣西筑摩郡福島町四〇四番地 安井 正 夫  
長野市南區町三番地 田 中 彌 助  
長野市四后町乙二十一番地 長野新聞社活版部  
長野縣西筑摩郡福島町二八九番地 蘆澤 書 店